広報 Nikaho City
にかほ

『V』宣言

ブラウブリッツ秋田の
今シーズンの活躍に

＝関連ページ　2～5ページ＝

太鼓判

主な内容

■特集・スポーツが持つ力……P 2～5
■スポーツ推進委員の役割……P 6～7
■まちの話題……P 8～9
■市役所から行政情報チャンネルP12～16
（介護予防基本チェックリストほか）
■くらしの掲示板……P17～18

vol.156
2012 3.15
http://www.city.nikaho.akita.jp

がんばろう東北

白瀬南極探検隊100周年記念特集

その弐拾壱

未知に挑む
～南十字星のもとに～

突進隊の道のりを再現　～県民ミュージカルより～

大和雪原（やまとゆきはら）へ（後編）
～決死の犬ぞり・最終到達地点～

1月25日午前8時、武田は連日の疲れのため白瀬に起こされます。武田が担当する天測は、毎日午前8時と午後4時に経度、正午に緯度を測って位置の記録を取っています。同日、空が曇色を増す中、正午に出発。犬はなかなか進もうとせず、人間が先頭になって道先案内を務めます。雪の丘で後隊が前隊を見失ったり、雪の反射で前方が直視できず、迂回や傾斜には相当な苦労をして前進します。

午後3時、気圧計の針が下降し、大吹雪になります。南極記には「猛風、猛雪、極地の寂寥（せきりょう）々を破って、物凄きと限りなく、（中略）咫尺（しせき）を弁ぜず※という光景」と記され、後隊が見えなくなってしまいます。零下25℃、体が凍結しそうな寒さに、白瀬は応急の防寒テントを設営して後隊を待ちます。呼笛を吹こうとして、笛で唇が凍傷を受ける程の寒さでした。花守が泣き出しそうな声で後隊を呼びますが、その度に、強烈な寒気が咽喉の奥まで入り込み知覚を失いそうでした。猛吹雪の中、30分程叫んでも応答がなく、白瀬も武田も絶望したといいます。

そこへ何処からともなく、かすかな声が聞こえ、一点の黒影が次第に近づいて来ます。後隊の三井所でした。互いに呼び交わして再会。「ああ此時（このとき）の嬉しさ！筆にも言葉にも尽せない。読む人の想像に一任する外はない」と、この時の心情が記されています。はぐれた後隊は、前隊の犬が雪上に残した凍傷の血痕や糞尿の痕跡を辿ります。三井所には一点の光明、神の導きに思えたといいます。零下22℃、テント内にも雪が降る中、隊員たちは夢路を辿ります。

翌26日、食糧が底をつきかけ「今日と明日、出来るだけ進んだ後、引き返そう」と協議して先を急ぎます。

左から、三井所、白瀬、武田、山辺

最終到達地点「嗚呼、大和雪原よ！！」

27日は午前5時半に出発。蜃気楼（しんきろう）にも惑わされました。犬の疲労が激しく、氷骨が進行を阻みます。喘ぎながら前進を強行した末、進行を止めたのは翌28日、午前0時30分でした。零下19℃。武田は夜通し観測に従事し、経度は午前8時の測定で西経156度37分。同日は午前11時に起床し朝食をとり、正午に緯度を観測。満天の厚い雲のため天測できず、仕方なく推測法により南緯80度05分と決定。隊員一同は、目的とした学理上の観察をほぼ達成したと、この地点を最終地点とします。

テント脇に南極探検寄付者芳名簿を入れた銅箱を埋め、竹竿に日章旗と赤い三角形のブリキ製回転旗を立て、突進隊5名全員が整列。国旗の下、応援者諸氏への感謝を厳かに述べた後、天皇陛下へ万歳三唱を行います。

その後、この露営地の周囲、際限ない大雪原を「大和雪原」と命名。時は午後0時20分。「国旗は極風に翻（ひるがえ）り、（中略）嗚呼（ああ）大和雪原よ!!今より以後千歳、萬歳、地球の存続する限り、永遠に我が国の領土として栄えよ」と感慨無量の光景を写真に収めています。

※「咫尺を弁ぜず」視界がきかず、ごく近い距離でも見分けがつかないこと。

白瀬日本南極探検隊100周年記念事業推進事務局
☎38－4670
白瀬南極探検隊記念館
☎38－3765

企画・編集／にかほ市広報委員会　発行／にかほ市役所
〒018－0192　秋田県にかほ市象潟町字浜ノ田１番地
☎0184－43－3200（代表）☎0184－43－7510（直通）
電子メールアドレス　info@city.nikaho.lg.jp
ホームページアドレス　http://www.city.nikaho.akita.jp